

箱根八里

作詞 鳥居枕(まこと)
作曲 瀧廉太郎

第一章 昔の箱根

箱根の山は天下の嶮
 函谷関も物ならず
 万丈の山千仞の谷
 前に聳え後に支ふ
 雲は山をめぐり霧は谷をとぎす
 屋猶闇き杉の並木
 羊腸の小径は苔なめらか
 一夫関に当るや万夫も開くなし
 天下に旅する剛毅の武士
 大刀腰に足駄がけ八里の岩ね踏み鳴らす
 斯くこそありしか往時の武士

(嶮けん)
 (函谷関かんこくかん)
 (万丈ばんじょう、千仞せんじん)
 (聳そび、支ささ)
 (猶なお、闇くら)
 (羊腸ようちよう、小径こみち)
 (一夫関いっぷかん、万夫ばんぶ)
 (足駄あしだ)
 (斯か、往時おうじ)

第二章 今の箱根

箱根の山は天下の阻
 蜀の栈道数ならず
 万丈の山千仞の谷
 前に聳え後に支ふ
 雲は山をめぐり霧は谷をとぎす
 屋猶闇き杉の並木
 羊腸の小径は苔なめらか
 一夫関に当るや万夫も開くなし
 山野に狩りする剛毅の壮士
 獵銃肩に草鞋がけ八里の岩ね踏み破る
 斯くこそありけれ近時の壮士

(阻そ)
 (蜀しよく、栈道さんどう)
 (壯士ますらお)
 (草鞋わらじ)

箱根の山は天下に名高い嶮しい山である。嶮しいことで名高い中国・河南省の函谷関も比較にならないほどだ。

高い高い万丈の山と深い深い千仞の谷。

(「丈」は十尺、「仞」は六尺という長さの単位) 山は前方に聳え、谷が後方から山を支えているようだ。

(「支ふ」の発音は「ささう」でなく「さそう」) 雲は山を取り囲み、霧は谷底が見えないほどに立ち籠める。

杉の並木は昼でも暗いほどに生い茂っている。曲がりくねった小道は苔でぬるぬるしている。

(「羊腸」は羊の腸のように曲がりくねった様子) 一人の男が関所を守れば、一万人の軍勢が押し寄せても破

ることはできない。(箱根の関所が嚴重に守られている様子を歌っている)

全国を旅する武勇の武士は、腰に大刀を差し、高下駄を履いた足で、箱根八里を踏み越えて行く。

(高下駄で踏破するので、高らかな音がするのを「踏み鳴らす」と言ったもの) 昔の侍はこんなふうだったんだなあ。

(「かくありき」の真中に「こそ」を入れて強めたために、文末は「しか」という已然形になって、係り結びをしている。

「か」があるからと言って疑問文なのではない)

《一番は武士の時代の箱根をうたい、二番はこの歌のできた明治後期の箱根をうたっている。だからこそ、最後は「近時の壮士」となっている》

箱根の山は天下に名高い嶮しい山である。(「阻」は一番の「嶮」と同じ。「嶮阻」という熟語あり)

高い高い万丈の山と深い深い千仞の谷。中国・四川省の国の断崖に掛かる栈道も比較にならない。

高い高い万丈の山と深い深い千仞の谷。山は前方に聳え、谷が後方から山を支えているようだ。

雲は山を取り囲み、霧は谷底が見えないほどに立ち籠める。杉の並木は昼でも暗いほどに生い茂っている。

曲がりくねった小道は苔でぬるぬるしている。(「羊腸」は羊の腸のように曲がりくねった様子)

一人の男が関所を守れば、一万人の軍勢が押し寄せても破

ることはできない。山野を狩りして回る勇壮な男たち。獵銃を肩に掛け、足には草鞋を履いている。

このごろの男たちはこんなふうなのだ。(第一章では昔のことなので過去の助動詞「き」の已然

形「しか」を使っているが、第二章は現在のことなので「けり」の已然形「けれ」。「けり」は過去ばかりでなく詠嘆を表すことがあり、現在のことにも使える)